2024 年度

学位（博士）の授与に係る論文内容の要旨及び論文審査結果の要旨

（2024 年 9 月授与分）

北九州市立大学大学院
社会システム研究科

目　　次

学位番号	学位被授与者氏名	論文題目	頁
甲第１２４号	周　云	現代中国語における“中心不定量”表現についての認知言語学的研究	1

学位被授与者氏名	周 云（しゅう　うん）
学位の名称	博士（学術）
学位番号	甲第 124 号
学位授与年月日	2024 年 9 月 25 日
学位授与の要件	学位規則（昭和 28 年 4 月 1 日文部省令第 9 号）第 4 条第 1 項該当
論文題目	現代中国語における“中心不定量”表現についての認知言語学的研究
論文題目（英訳または和訳）	A Cognitive Linguistic Study of "Zhong Xin Bu Ding Liang" Expressions in Modern Chinese
論文審査委員	論文審査委員会委員主査： 北九州市立大学外国語学部　教授　博士（教育学） 胡　玉華 同審査委員： 神戸市外国語大学外国語学部　教授　文学博士 任　鷹 同審査委員： 北九州市立大学外国語学部　教授　博士（文学） 堀地　明
論文審査機関	北九州市立大学大学院社会システム研究科
審査の方法	北九州市立大学学位規程（平成 17 年 4 月 1 日大学規程第 79 号）第 10 条各号の規定に基づく学位授与判定による
論文内容の要旨	本論文は、認知言語学の理論を用い、“X＋前后”、“X＋上下”、“X＋左右”という３つの不定量表現について考察を行ったものである。 本論文は全５章から構成されており、各章の概要は以下の通りである。 第１章の序論では、７種類の不定量表現の中から、“X＋前后”、“X＋上下”、“X＋左右”という構造を持つ“中心不定量”（「中心不定量」）を研究対象として明示した。そのうえで、「中心不定量」に関する先行研究を概観し、先行研究では、主に言語現象の分析に基づき、不定量の意義や X の種類と特徴に焦点が当てられていたことを指摘し、本研究では、認知言語学の視点から、「中心不定量」の認知的メカニズム、X の認知的特徴、及び X のプロトタイプに注目することを示した。また、本研究で採用した認知言語学的理論（カテゴリー化とプロトタイプ理論、イメージ・スキーマ理論、メタファー、容器のメタファー、メトニミー、自己中心の方向づけ）についても解説した。さらに、「中心不定量」を論じる際に明確にする必要のある“时点”、“时量”の概念を分析し、“时点”は時間量と時間的指向性を内包しており、時間順序を表しているが、“时量”は時点間の任意的距離を表し、時間的指向性がないという結論に至った。 第２章は「中心不定量」の１つである“X＋前后”を取り上げた研究である。本章では、まず、“前后”という空間方位詞はどのように空間不定量から時間不定量へ拡張されたかについて解説し、“X＋前后”の認知的メカニズムの解明を試みた。即ち、“X＋前后”の不定量表現は「順序型」時間メタファーによる空間不定量から時間不定量への写像であることを明らかにした。次に、“X＋前后”における X について考察を行った。即ち、X は認知主体の視点によらない

	時間性語句となると論じたうえで､Xの共通的認知特徴を以下２点にまとめた。① Xには時間幅が内含されているが、この時間幅は一定である。② Xは「開始」→「経過」→「完了」という「内在的参照枠」による方向づけをしている。最後に、X のプロトタイプについて分析を行った。その結論として、“数词＋时点量词”、“内在指向时间名词”、“事件名词”はXのプロトタイプであり、“事件动词”と“事件动词短语”” はその周縁である。また、“数词＋岁”は“数词＋时点量词”に含まれ、X のプロトタイプの特例であり、“数词＋时量量词”はコンテクストや他の修飾成分により時点表現となる場合のみ、“X＋前后”の不定量表現になることが可能であると指摘した。 第３章は「中心不定量」の“X＋上下”を取り上げた研究である。本章では、まず、“上下”という空間方位詞はどのように空間不定量から数量不定量へ拡張されたかについて解説し、“X＋上下”の認知的メカニズムについて新たな見解を提起した。即ち、“上下”による時間認知には２つの構造があるとし、１つは「自己中心の方向づけ」に基づいた視点の連続スキャニングによって、“上→下”という時間の方向性が生まれるもの、もう１つは太陽の移動軌跡に基づいたメタファー写像によって、 “上→下”の時間軸に有界性及び段階性が生まれるものである。この段階性は境目から至高基準点までの“上”の段階と至高基準点から境目までの“下”の段階に分けられる。また、“上”と“下”は１つの空間として、容器メタファーにより認知され、容器にある内容物の増減変動により数量不定量へ拡張されると論じた。次に、“X＋上下”におけるXの共通的認知特徴について、以下３点にまとめた。① X は連続的な時間量であり、時間方向性を背景とした時間性語句となる。② Xは連続的な数量であり、「距離」を表す場合のみ、“高度”、“深度”はそのプロトタイプである。③ Xは一括スキャニングにより認知されるものに限られる。最後に、Xのプロトタイプについて分析を行った。その結論として、連続量である“时量词”や“度量词”からなる数量語句はXのプロトタイプであり、一括スキャニングにより認知される“个体量词”、“集合量词”、“种类量词”、“动量词”による数量語句はX の周縁であることを明らかにした。 第４章は､「中心不定量」の“X＋左右”を取り上げた研究である。本章では、まず、“X＋左右”の認知的メカニズムについて解説を行った。即ち、“左右”という空間方位詞は不定量表現から時間不定量や数量不定量へ写像され、時間不定量においては、“左右”の空間軸は「相対性」「方向指示の不明確性」「対称性」という３つの特徴を持つことから、“时点”と“时量”の両方に写像されると論じた。次に、“X＋左右”におけるXの共通的特徴について、時間と数量に分けて以下２点にまとめた。① X は時間の方向性を明示しない時間フレーズとなり、時点と時間軸の点間距離を意味する時量が含まれる。② X は方向性に欠ける数量フレーズとなる。最後に、“X＋左右”におけるXのプロトタイプは、“时量词”、“度量词”、“个体量词”による数量語句であるが、“集合量词”、“种类量词”、“编号量词”、“容纳量词”、“动量词”からなる数量語句はその周縁であると論証した。 第５章は本研究の総括である。まず、「中心不定量」という不定量表現の大きな枠組みに視点を置き、それに対応する“X＋前后”、“X＋上下”、“X＋左右”における認知的共通点を以下 4 点にまとめた。即ち、① 方向指示を特徴づける。② 指示する対象物は主観的で可変的なものである。③ 時間認知まで拡張

	できる。④ 中心参照点を取ることが可能である。次に、認知言語学の理論的枠組みを方法論とした本研究の成果をまとめた。即ち、３つの「中心不定量」表現において、その認知的メカニズム及び認知的共通点、それぞれに対応したXの種類と共通的特徴について初めて体系的に考察し、これまで解説できなかった言語現象に対する新たな解説を試みた。最後に、本研究の意義及び今後の課題を明確にした。
論文審査結果の要旨	“X＋前后”、“X＋上下”、“X＋左右”の不定量表現に関する研究はすでに散在しているが、本論文では、空間体験という一般的な認知はどのように時間域や数量域に拡張されたのかについて、認知言語学の理論に基づき、体系的な分析を行った。本研究は以下の点において、高く評価できる。① “X＋前后”、“X＋上下”、“X＋左右”の不定量表現について、初めてその認知的メカニズムの共通点と相違点を分析することができた。② “X＋前后”、“X＋上下”、“X＋左右”におけるXの認知的特徴、語句種類及び共通点と相違点について、初めて推察することができた。③ “X＋前后”、“X＋上下”、“X＋左右”の“加和”（「プラスする」）と“选择”（「選択する」）の２つの意義を明確させることができた。④ これまで解説できていない言語表現や不定量表現の形式について、新たな視点で解説することができた。 このように本論文は、認知言語学を方法論とし、“X＋前后”、“X＋上下”、“X＋左右”の不定量表現を体系的に分析したことを評価すると同時に、今後の研鑽に期待して、以下の点について改善を助言する。① 例文の出典や参考文献の引用、作者の名前などの間違いが見られた。② 不定量として分析した言語現象の中には、「量」と判別しにくいものもあった。③ 本論文で提起した“中心不定量”という概念は、「定かな数値か数量となるX に“前后”、“上下”、“左右”を後続させ、X を中心参照点としその周囲への拡散量である」と定義された。しかし、現代中国語の語彙構成の規則（「名詞＋名詞」構造の場合は、「修飾語＋中心語」の関係になる）に従った場合、“中心不定量”という表現は本論文の定義に反し、「中心の不定量」或いは「中心が不定量である」という意味合いになるため、読み手に誤読を与えかねない。④ 序論の第１章では、認知言語学のアプローチの説明として、認知言語学の理論や概念をいくつか明示したが、理論の取捨に明確な基準がなく、概念間の関係性も曖昧である。例えば、論文に繰り返し応用されている認知言語学において最も重要な「イコン性理論」は明示されていないが、後文にほとんど応用されなかった「メトニミー」は紹介されている。また、「容器メタファー」は「メタファー」の下位概念であるが、同位概念のように紹介されている。 2024 年 8 月 9 日に、北九州市立大学北方キャンパス 3 - 329 教室において、審査委員全員出席のもとで最終試験を実施して学力を確認し、論文の説明を受け、質疑応答ののちに、全員一致で当該論文が博士(学術)として十分な内容であると判定した。

2024 年度学位（博士）の授与に係る論文内容の要旨及び論文審査結果の要旨　第 33 号　（2024 年 9 月授与分）

発行日　2024 年 9 月

編集・発行　北九州市立大学　学術振興課

〒802-8577
北九州市小倉南区北方四丁目２番１号
電話 093-964-4021